



1978年12月21日号

歴史を語るスコッチ

クlayモア



スコットランド物語 ⑬

焚刑

バトリック・ハミルトンは、教皇豊かであったばかりでなく、富裕で、おまけに結婚したての前途洋々たる青年であった。

セントアンドリュースの大司教、ジェームス・ビーードンは、新しい信仰の人気とその拡大をおさえるため、彼を捕え、信仰を変えなければ焚刑に処すとおどした。

しかし、彼は信念をまげなかった。地獄の劫火に魂を焼かれるよりも、肉体を焼かれた方がいいと言って、スコットランドで初めての焚刑を受ける事となった。

焚刑は、セントアンドリュースのサルヴェイター・カレッジで、大勢の見物人の見守る中で行われたが、なれないため、処刑台の作りがわるく、途中で雨が降ったりして、死に至るまで6時間も苦しまなければならなかった。

しかし、彼の聖なる態度は、人々に大きな感動を与え、かえって、その信仰は、国中の人々に広まり、カトリックの信者につく者さえ、強くひきつけられた。ジェームスV世さえ、信仰そのものではなかったが、世に起ったある種の情愫の昂りにつられ、息子の教育に進歩的なユニリスト、ジェームス・ブキャナンを雇ったりした。(S)

総発売元 ロイヤルリカー株式会社
☎(03)440-0621~2
(総代理店 オールドワン株式会社)

私の本棚から

●中嶋嶺雄氏(東京外大教授)の推選する五冊

『冷戦の起源/戦後アジアの国際環境』永井陽之助著(中央公論社、二〇〇〇円) いまや、永井政治学ともいわれるブリリアントな政治学者が、戦後アジアを規定した冷戦の起源と構造およびそのA哲学Vの解明に



というユニークな発想で相関的・総合的にとらえ得るのではないかと試みた野心的な評論。

全力投球した労作。国際政治の興味深さを堪能させてくれる。

『共同体意識の土着性』三輪公忠著(三一書房、二〇〇〇円) 近代日本とアジアの共同体意識の原点を「地方主義」の立場から照射した書。「レオナルド・ダウインチ/芸術と生涯」田中英道著(新潮社、一八〇〇円) 西洋美術史の俊英が東洋人の眼でついに達成したレオナルド研究は西洋人の視座をも揺るがすだろう。「学者商売その後」野々村一雄著(新評論、九八〇円) 十八年前の快著の続編だが、さらに味わい深い。



氏 津本 氏 興要氏(早大教授・近世文学)

『大河内にはそういう従順な、非常に仏教的な面があった』と推察しているのは、実に示唆に富む見方ではなからうか。

『映画渡世』マキノ雅弘著(平凡社、天の巻と地の巻各二〇〇円) 『日本映画の若き日々』稲垣浩著(毎日新聞社、二二〇〇円) 『写真で見る大衆文学事典』興津要著(桜楓社、二二〇〇円) 『君は時代劇映画を見たか』佐藤忠明著(じゃこめてい出版、一五〇〇円)

●寸言インク

『大河内にはそういう従順な、非常に仏教的な面があった』と推察しているのは、実に示唆に富む見方ではなからうか。

●寸言インク

『大河内にはそういう従順な、非常に仏教的な面があった』と推察しているのは、実に示唆に富む見方ではなからうか。

●寸言インク

『大河内にはそういう従順な、非常に仏教的な面があった』と推察しているのは、実に示唆に富む見方ではなからうか。

●寸言インク

『大河内にはそういう従順な、非常に仏教的な面があった』と推察しているのは、実に示唆に富む見方ではなからうか。

●寸言インク

『大河内にはそういう従順な、非常に仏教的な面があった』と推察しているのは、実に示唆に富む見方ではなからうか。

●その人気と結婚

銀幕では見られない大河内の恋愛と人生
八伏見直江との同棲に破れて
こんな大河内伝次郎にとって
昭和四年は、まことに身辺多難な年だった。それはまず、前年

夏に起きた「大菩薩峠」の映画化問題がこじれて、伊藤大輔が日活を退社したことが第一。つきには、かねて噂されていたコンビの伏見直江との恋愛問題が表面化。さらに水谷八重子との結婚のゴシップが流れたことが、これに加わるからだ。



大河内がいったんやめた日活にまた復帰した経緯をみると、そこには「一番イキの合った相手役としての直江が日活にのこっていたこと」が、大きな要因

となっていると著者はみる。事実、ふたりは再びコンビに戻ると、まもなくただならぬ関係となり、同棲することになる。が、この生活もやがて大河内が、母の命するところに従って他の女性と結婚することにより、ついに破局を迎えるのである。殺陣場面ではかならず真剣を使っていたからすこい迫力があったこともあったと思う。

それはさておき、大河内伝次郎はいまは亡い。昭和三十七年、胃ガンが死因だった。(載)